▼▼マジックの真実(下)

回避可能な戦争だった

小松啓一郎

戦争回避を目指す日米交渉が続けられていた一九四一年十一月十九日、日本政府から大使館など在外公館に対し、後に「ウィンド(風)メッセージ」として知られるようになる暗号電文が送信された。

これは近い将来、日本の対外関係が重大局面に直面した場合には「天気予報」を装った形で伝えると知らせたものであり、日米危機は「東の風、雨」、日ソ危機は「北の風、曇り」、日英危機は「西の風、晴れ」。そして、これが流されれば、各在外公館で機密書類や暗号書などを処分するよう指示したものであった。

× × ×

米国側では「二三五三号電」として同日中に解読し、「暗号タイプJ―一九」と記録したが、実は英国・極東連合局(FECB)もその傍受、解読に成功していた。しかし、傍受した英軍情報将校は戦後になってから米英両国の解読文に重要な食い違いがある事実に気づき、それを著書に記している。日本語原文が未発見であり、どちらが正確だったかは不明であるが、同一電文を傍受した米英間で解読内容が異なっていること自体、他国の暗号解読がいかに困難な作業であるかを如実に物語る。

しかも、同盟国同士の米英間ではあっても当然、情報分野での実質的協力はほとんどなく、双方の解読班が付き合わせて「不一致」に気づくなどということもなかった。結局、「風メッセージ」自体を誤訳してしまっては、それに基づく「天気予報」をのちに傍受してみても、正しい意味を摑めるはずがない。それでも、この両国はそれぞれ自国の解読内容が「正しい」と信じてきたのである。

また、日米関係が「重大局面に直面」しつつあったとしても、一方では外交努力も継続されている時期であり、これらの電文発信がそのまま日本政府の「対米戦争決定」などを意味するものではなかった。しかし、この点でも、米国では戦後に至るまで誤解している向きが多い。

× × ×

「マジック」情報に含まれる誤訳・曲訳は驚くほど多く、八カ月間の交渉最後の三十日間に限定してみても、決定的と言える深刻な誤りが四十例以上という凄まじさである。言語学的に見て日本語の英訳が容易でないにもかかわらず、その困難を軽視し、機密保持の観点から日本語に流暢な日系米国人を一切信用せず、少数の研修途上の未熟練担当者に時間的重圧の中で作業をさせた結果、正確さへの再チェック機能を働かせることができなかった悲劇とも言える。

もちろん、複雑な日米戦争の発生原因を「誤訳に尽きる」などと単純化して考えるのは誤りである。と言うのも、そもそも双方で歴史的に蓄積された先入観や偏見、誤解などがあり、それが「開戦もあり得る」というぎりぎりの緊張下で、誤訳や曲訳の頻発という具体的な形で現れた背景事情があったからである。

実際、戦後の極東国際軍事法廷(東京裁判)や米国議会で開かれた公聴会での「マジック」関係者らの証言によれば、彼らは少なくとも開戦の数カ月前には「戦争不可避」を固く信じていた。両国の交渉担当者が「戦争回避」を目指して必死に交渉を続けていた時期に、翻訳担当部署ではこのような先入観に縛られて誤訳や曲訳を繰り返し、その不正確な情報が最終的には交渉担当者までミスリードしてしまったのである。しかも、当時の日米間には信頼関係が著しく欠け、「待てよ」と冷静に見直す機運もなかった。

東京裁判や米議会の公聴会では、米当局が日本の「悪意」による「二枚舌外交」を証明しようと「マジック」情報の一部を提出したが、誤訳問題が指摘され、引っ込めた。

さらに、東京とワシントンで提出された「マジック」文を詳細に見比べれば、それらが戦後、情報当局によって繰り返し改ざんされた事実も浮かび上がる。「情報操作」が行われたのであった。

あの日米戦争を「歴史的必然論」に立って解釈する戦後の研究者の間では、誤訳があっても歴史の流れを変えるような重大な役割は果たさなかったとされている。しかし、米国の「マジック」担当者らが戦後になってから改ざんを繰り返した事実は、彼らの中にも「マジック」の過ちの重大性に気づき、それを隠そうとしていた人々がいたことを意味する。

× × ×

もしも、両当事国間に「パーセプション(認識)ギャップ」の存在を自覚する視点があり、共に協力して乗り越えようとする信頼関係があれば、あの戦争は回避できた。しかし、自国の「正義」を固く信じ、相手の意図を「悪」と決めつけた両国の姿勢は衝撃的なほど似ており、全てを不可能にしてしまった。

歴史に「もしも」は禁物だ、という考え方もある。歴史学では重要なルールだが、国際関係論の世界では別の視点も必要である。そこに見出される諸要因を多角的に分析した上で、「もしも」と設定する新たな条件下、シミュレーションを試みるのも大切な「頭の体操」であり、さらなる悲劇を防ぐ有効な手段の一つにもなり得る。

無意識レベルでの相互認識ギャップが誤解や誤訳を招き、戦争回避を「不可能」にしてしまったことは事実だが、同時に、「もしも」それら先入観を自覚し、共に乗り越えることができれば、回避可能な戦争だったということも事実である。

数え方にもよるが、日米以外の周辺国も含め、数千万人に及んだともされる犠牲者への真の手向けは、この事実を率直に認めることから始まる。

(地球環境平和財団欧州代表)

□

「マジック」については、小松さんの著書『暗号名はマジック』(KKベストセラーズ)に詳しく紹介されている。

文化